2014 年 4 月 19 日、月例講座、講演要旨

演題 「村山定男先生 そして、科学を伝えるということ」

朝日新聞、 辻篤子先生

村山定男先生は、天文学の専門家とアマチュアをつなぐ、架け橋のような存在だった。村山先生の周りにはいつも、プロ、アマを問わず、さまざまな人が集まっていた。共通するのは、天文が好き、天文に多少なりとも関心がある、ということだ。私は、科学記者１年生のときに、上野の国立博物館の先生の部屋を訪ねて以来、いわば村山ワールドの大きな引力圏の中をぐるぐる回ってきた、というような気がする。引力圏といっても、そこは、さまざまな人が行きかう、出入り自由の自由な空間だ。

先生はその中心にいて、天文の普及活動に力を入れてこられた。振り返れば、先生が伝えたかったことは、天文を入口とした「科学的な世界観」とでもよぶべきものではなかったか、と思う。

私は長年、科学の報道に携わってきた。ニュースを追いかけて走り回ってきた駆け出し時代から、やや余裕を持って科学を眺めることができるようになってきた現在、私自身が伝えたいと強く思うのは、私たちの世界観、生命観を変えるような科学、いいかえれば、科学の目で見ると、世界はどう見えるのか、ということだ。２１世紀に住む私たちが私たち自身を理解するうえで、ちょっと大げさにいえば私たちの文明を理解するうえで、科学が果たす役割が大きいことはいうまでもない。天動説から地動説へといった大転換ではないにしても、世界がちょっと変わって見えてくるかもしれない、そんな思いで書いた記事を少し紹介してみたい。

タイトルを挙げれば、「アルマで思う窒素の物語」「セシウム、ストロンチウムとうるう秒」「朝寝坊は DNA のせい？」である。やや思わせぶりなものもあるが、「なあんだ、あのことか」と思われるものもあるに違いない。実はいずれも、教科書に出てきたり、学校で習ったりする話だ。ちょっと違った目で見ることで、小さな発見につながれば、と思う。

最後に、科学を学ぶ意味についても少し考えてみたい。